

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	多機能型事業所こーず（放課後等ディサービス）		
○保護者評価実施期間	2026年1月16日 ～ 2026年2月9日		
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	14	(回答者数) 13
○従業者評価実施期間	206年1月16日 ～ 2026年2月9日		
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	3	(回答者数) 3
○事業者向け自己評価表作成日	2026年2月12日		

○ 分析結果

	事業所の強み（※）だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	専門的な支援体制を構築しています	内部での支援に加え、専門的な知見を持つ外部講師を招聘した「特別専門プログラム」を積極的に導入しております。ビジョントレーニングや体操教室など、遊びの要素を取り入れながら身体機能や視知覚機能を高める活動を通じ、お子さまが楽しみながら確かな成長を実感できる機会を創出しております。	今後、新たに配置予定の専門職（言語聴覚士・作業療法士）と既存スタッフによる「ケース検討会」を定期開催し、多角的な視点での支援力向上を図りたいと考えています。専門的なアセスメント（評価）に基づき、生活動作やコミュニケーションにおける課題解決をより確実なものにしていきます。
2	子どもに寄り添った支援を心がけています	お子さま一人ひとりの個別支援計画を軸に、それぞれの特性や発達段階に深く寄り添った支援を行っております。個々の成長スピードを尊重し、画一的ではない「その子に最適化された関わり」を充実させることで、着実な歩みを支えています。	支援をするための療育を考えた活動を導入していく（PECSやSSTなど） それぞれの支援員の主観に頼るのではなく、スタッフ間での振り返りを日々実施し、複数の視点で共有することで、支援の偏りを防ぎ、常にその時のベストなアプローチへとアップデートしていきます。
3	保護者との連携を積極的に行っています	連絡帳や面談を通じた定期的な情報共有を行い、家庭と連携した支援を実施し、当事業所の最大の強みは、ご家庭との「密な対話」と「強固な連携」です。 お子さまの成長は、ご家庭と事業所が同じ方向を向き、歩調を合わせることで最大化されと考えているので、変化を共有し合うだけでなく、寄り添うことと考えます。	・家庭における状況を共有し、最良な支援方法や考え方を勉強し充実していく機会を考え個別面談等を通じ提供していく

	事業所の弱み（※）だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域との連携不足	地域柄ということもあるが、地域において子どもたちとの交流機会が提供できていない 慢性的な「リソース（人員・時間）」の不足で、日々の直接支援で外に目を向ける余裕がなく、現場を離られる職員がいないため、外部のネットワーク会議に参加する時間を捻出できていない状況です。	職員数（配置）を充実させ、民生委員や他の放ディなどと連携し交流する事や、施設そのものを地域に開き、障がいへの理解を広める活動をおこなったり、（地域住民向けのイベントなど）災害時の協力体制：地域の避難訓練に参加し、いざという時の福祉避難所としての機能や支援体制を地域と確認していきたいと考えています。
2	学校授業日の外出行事の実施不足	下校時刻の違いにより、学校休業日には外出行事を定期的に実施しているが、学校授業日の外出行事ができていない 施設に残る子と外出する子に分かれる事で、基準以上の人員を配置しなければならず、平日の限られたスタッフ数では対応できていない状況にある	小集団での外出行事を検討・実施する 学校休業日の外出行事を増やし、社会性を養う「ソーシャルスキルトレーニング」で施設内という「守られた環境」から一歩外に出ることで、生きた社会経験を積むこと、公共マナーの習得など社会のルールを実体験する等で「できること」を増やす成功体験を身につけていく
3	支援プログラムの年間計画不足	支援に重点を置いているが、地域支援・連携に関する情報収集や取組みが不足しており、年間計画として立案していない 「誰か一人が頑張る」状態だと計画は破綻するので、チームで回す工夫を考える。	地域支援・連携に関する情報収集を強化し、年間計画に取り組むことで、地域とのつながりを深める 方法として、「月間テーマ」等を設定し、「今月は公共マナーの月」や、日々の活動（外出、読み聞かせ、クッキング）などで紐付けし実施していく。 職員の得意分野ごとに月替わりで担当を考えていく。